

札幌演劇シーズン2018-冬 レパートリー作品

ユー・キャント・ハリー・ラブ!

2018.2.7 WED - 12 MON | AT 札幌市教育文化会館小ホール

You can't hurry love!

弦巻楽団 #29

作・演出 弦巻啓太

出演 永井秀樹(青年団/東京) 岩杉夏(ディリパレー/ダイバース) 小林なるみ(劇団回廊編) 遠藤洋平 柴田知佳



岩杉夏 × 曾我夕子

聞き手：弦巻啓太



主人公のシェイクスピア研究者・奥坂教授がその声をしこしてラジオパーソナリティ・冬樹里絵。今回、二度目の冬樹里絵を演じる岩杉夏と、2013年の三演目で里絵役を演じた曾我夕子、専門学校時代の同級生で、現在は札幌演劇界で活躍する二人が、「ユー・キャント・ハリー・ラブ」について、冬樹里絵について語りました。

弦巻楽団からオファーが来たよ、って聞いて、舞い上がって話の内容も知らずにOKしました(笑)
—曾我

—曾我さんは出演した時のこと、何か覚えてますか？

曾我 夕子 まず最初に、弦巻楽団さんからオファーが来たよ、っていうのを所属しているyhsのリーダーの南参さんから聞かされて、「あの私も所属しているんだ!」って思ってたんですけど、速攻OKです!」って言ったんです。話の内容を詳しく知らないで(笑)OK出してしまったんですよね。申し訳ないんですけど、フアッって舞い上がってたんですよ。

岩杉夏 嬉しかったのね。

曾我 そり 嬉しかったの。すごい嬉しくて、わーやったー!」ってなってたら、ラジオのパーソナリティ役だって言われて(笑)。

岩杉 やったじゃんラジオ! 授業! 授業やったじゃない。

—お二人は、もともと同級生なんですよな?

曾我 もともと同級生。

岩杉 同じ声優の専門学校の同級生です。

—じゃあ、マイク前で話ったり、舌舌の授業なども?

岩杉 やりましたやりました。

—では冬樹里絵の設定である、ラジオのDJ、気象予報士、パーソナリティというのは、むしろってわけな…?

岩杉 そうそうそ! 我がやってきたことといえば、ね?

曾我 だけど、私、舌舌が、非常に苦手というか、上手く喋れなくて。ラジオのパーソナリティの役、しかも声に恋してもらっている役だと知った時に、「やばい!」と思って! これはやばいぞって焦って、ちょっと早口言葉練習した覚えがあります。一生懸命。青巻紙やってた。

—稽古に入ってから感じとか覚えてます?

曾我 初めましてというか、お顔は拝見したことあるけど、とか、一緒に現場だけどもあんまり関わったことない、からの人が結構いらっしやって、最初はドキドキして行ってたんです。でも、まっつさん(松本直人さん)も、フレンドリーに接してくださって、すぐ溶け込めた気がします。ただ、セリフがいかんせん、回らないっていう…。

岩杉 その焦りは常にあった?
曾我 これはやばいぞ!」。「速めなテンポで喋って!」という演出だったので、これを早く言わなきゃいけないだっという

岩杉 (笑)

曾我 ただのキレる人になっちゃいそうに、ならない?

岩杉 傷ついた人間っていうのは土台にあると思うんですよ。浮気されたことは1回や2回どころか、みたいな感じで、クズ男と付き合ってきて相当傷ついて、そんな時に、奥坂の言ってきたことを思い出したのか、とか、奥坂の本を読んだりして、「恋愛は弱虫のすることだ!」っていうところまで「あ、そうなんだ!」って思って離離したんじゃないかって思ってるんですよ。

曾我 なるほどね。

岩杉 でも、ひどい過去があっても人間は人間なので、普通に社会人として生きていく。その揺らぎというか、普通に生きているんだけど、どこか自信がなさそうとか、揺らいでとか不安定なのを、冒頭のシーンでは出すべきなんだっていうのが考えとして一個あって。それは私にはない部分なので、出るかなあ出ないかなあ。

曾我 (笑)

岩杉 キレるシーンに関してはある種あんまりリアルではないというか。お芝居ならではのデフォルメじゃないんですけど、そこはむき出しにする。

—怒ってる姿とか、感情をむき出しにする姿って、曾我さんが危惧したような、幼く見えてしまうという問題と起こごがちだと思のですが、曾我さんはそれを気にしてたんですか?

曾我 してました。キーキーキー言うだけになっちゃう。大人って何だろう?ってどんどんがんがらめになった時期があった気がします。

岩杉 私は喜怒哀楽をむき出しにするってことで、子供っぽくなるかもって心配をしたことが実は無くて。普段からむき出しにしかっての。

曾我 夏が怒ってる姿は、叱るに近い気がする。

岩杉 あー、なるほどね。

曾我 だから大人だなんてずっと思ってる。私はたぶん怒り側が強く、感情的にウーってなるから、子供っぽくなるんだと思う。

岩杉 そうかそうか。感情のベクトルの違いなのかな。

—それぐらい、やる人によって違いが生まれるっていうことですよね。岩杉さんは2016年の時のことで覚えてますか?

岩杉 実際に、ラジオのパーソナリティを6年くらいやっていたので、初めて、芝居以外でやったことを芝居に生かせる、すごい明確なチャンスだなんて感じたので、是非やらせてほしいって思いましたね。ラジオのシーンに関しては、あまり辛くはなかったんですけど、私は物凄く早口で喋る人なので、冬樹里絵のテンポを守りながら、周りに巻き込まれずに自分の空気生きていくのが、物凄く大変でした。こんなに速く喋ってて私、周りの邪魔になってないかって疑心暗鬼になりながらやっていた部分もあって。でも幕が開いて、かみ合わないからお客さんが笑ってくれたりしてるのを聞いて、あぁそうかこれが正解だったんだなって、初めて納得したみたいなところがありましたね。私は気づかずにいたけれど、これは緻密に計算されていたんだ。って、マジックにかかったような気分でした。あと初めて言われたのが「演技が親切すぎる」。お客さんにも役者にとっても演技が親切すぎるから、もともと不親切でいいって言われて。

曾我 へー!

岩杉 わかりやすい芝居を心掛けてきた自分にとって、物凄く新しい風が吹いたというか、どうい話になるんだらうってワクワク感が強くなって、観るのが楽しかったです。

—最後に、「ユー・キャント・ハリー・ラブ」のPRポイントとか、オススメをお願いします。

岩杉 観にきてくれよな!

曾我 私がやってたのが5年前だから、結構自分の中でも忘れてる部分とかもあるので新鮮な気持ちで絶対観てと思うんだ。里絵さんってどんな人だったっけ。

岩杉 私も客席で見たことないから、逆に曾我がもう一度やるのをご観てみたい。

—最後に、「ユー・キャント・ハリー・ラブ」のPRポイントとか、オススメをお願いします。

岩杉 偏屈といわれる教授なんけど、絶対に見てうちに前のめりで応援したくなること請け合いなので是非教授と一緒に物語を最後まで見届けたいと思います。あと、冬樹さんにも注目してください(笑)。もちろん他にも面白い、自分を生きている、人生を謳歌してるキャラクターたちがたくさん出ますので、いや、たくさんも出ないか。

曾我 3人くらいかな。

岩杉 是非教授と一緒に物語を、いや、教授と一緒にじゃないな、教授のことを温かい目で見守ってほしいなと思います。頭空っぽにして来て下さい。お願いしますー!



うしたくないんだけど、そうしたくないって思えば思うほどなぞりがちかもしれないみたいな混乱が。『再演の闇』と呼ぶことにしたんですけど(笑)。曾我って再演やってる?

曾我 yhsでは結構、再演をやらせてもらっていて。南参さんの演出が、前のやつはこうだったよ〜って考えながらやってたりするから、似てくるんだけど、やっぱり周りの先輩方がそれじゃ面白くねえよって変えてくるんだよね。前はと全然違うことやってくれるから、それにあわせていったらんだん違うようになっていく。

岩杉 なるほどね〜。

曾我 たぶんこの作品は主人公の奥坂教授が違ったらだいぶ違うと思う。

岩杉 全然違う。それはやっぱり今回の面白みだなんて思ってます。

—曾我さんどうですか、もう一回冬樹里絵をやってて言われたら。

曾我 やりたい気持ちと、果たして馬鹿にされずにできるのかっていう。

岩杉 (yhs)の先輩方から馬鹿にされまっかつたトラウマが。

曾我 私、千秋楽の最後のセリフ聴んでるんですよ。それを未だに馬鹿にされているの。

岩杉 千秋楽観にきちゃったんだ。

曾我 来ちゃった。ただ、あの頃よりかは大人だから私は、大人になっている。

岩杉 言い聞かせるの、自分に(笑)。

曾我 大人だから私は。だからあの時よりもうちょっと深くいける気がする。

—では札幌演劇シーズン2018-冬、始めますけど、2回目の冬樹さん、初めての再演とね。

曾我 ヒューヒュー!

—岩杉さんに曾我さんから何かメッセージを!

岩杉 励まして! がんばるから!!

曾我 今日、色んな話を聞いてて、松本さんじゃない教授とどう掛け合いというか、どうい話になるんだらうってワクワク感が強くなって、観るのが楽しかったです。

岩杉 観にきてくれよな!

曾我 私がやってたのが5年前だから、結構自分の中でも忘れてる部分とかもあるので新鮮な気持ちで絶対観てと思うんだ。里絵さんってどんな人だったっけ。

岩杉 私も客席で見たことないから、逆に曾我がもう一度やるのをご観てみたい。

—最後に、「ユー・キャント・ハリー・ラブ」のPRポイントとか、オススメをお願いします。

岩杉 偏屈といわれる教授なんけど、絶対に見てうちに前のめりで応援したくなること請け合いなので是非教授と一緒に物語を最後まで見届けたいと思います。あと、冬樹さんにも注目してください(笑)。もちろん他にも面白い、自分を生きている、人生を謳歌してるキャラクターたちがたくさん出ますので、いや、たくさんも出ないか。

曾我 3人くらいかな。

岩杉 是非教授と一緒に物語を、いや、教授と一緒にじゃないな、教授のことを温かい目で見守ってほしいなと思います。頭空っぽにして来て下さい。お願いしますー!

YCHILL

永井秀樹(青年団) × 松本直人

聞き手：弦巻啓太



弦巻楽団「ユー・キャント・ハリー・ラブ」は、今回の札幌演劇シーズン2018-冬レパートリー作品としての上演が5回目の再演となります。弦巻楽団の作品群の中でも屈指の人気舞台の主人公であるシェイクスピアを研究する教授・奥坂雄三郎を初演以来12年間、4度演じられた松本直人さんと、2018年バージョンで初めて奥坂雄三郎を演じていただく青年団の永井秀樹さんに、作品について語っていただきました。

—松本さんは初演(2005年)から奥坂雄三郎という役を演じていただきましたが、初演の思い出がありますか?

松本直人 思い出っていうほどでもないんですけど、すごいヘトヘトになったっていう記憶しかないです。最初と再演(2007年)までは本当に、なんかたばるまで動いたみたいな記憶がで、楽屋にも多分バナナ二本と栄養ドリンク二つとか置いて、ちょっとだけ舞台から抜ける時があるの。

永井秀樹 はいはい。

松本 その時、補給してました。

永井 稽古中に、袖にいろいろ物が置いてある話をする時になっちゃう(岩杉夏)とか、遠藤(洋平)君が「松本さんはなぜかバナナを置いていたって言ってました。2013年に再演した時には割と落ち難い方向に変わったんですか?」

松本 そうじゃないかなあと思うんですけど、自分では見えないので、比較がうまく出来ないんですけどね。

永井 多分、年齢も重ねられて、もう2013年の再演の頃にはいるだけで存在感が出てたんだらうなって気はしますけどね。

—永井さんは今、難い場面ってありますか?

永井 中盤が結構大変になるかっていう気は、単純にいるんな人が入り乱れて、やんややるから。昨日も演出で言われたらんですけど、あんまりテンポよくコメディみたいに自分からならないで、と。本当に下手するとそうなりがちなの。

松本 あーあー、ドタバタみたいな。

永井 そうそうそうそう。

—そうなんですよな、「ユー・キャント・ハリー・ラブ」は激しいことが起きているように、どこかいてい口火ですっどぐつぐつ燃込むような作品なんですよな。

永井 もしかしたら、この芝居ってそう動いたりなくても、成

立するんじゃないかなって思ってる。普通に会話劇としてやっても、そこそこ面白く見れるはずだけど、つい、やり取りが盛り上がりすぎてしまうんですよ。

松本 コメディは結構演じてらっしゃいますか?

永井 コメディはやってますけど、あんまり得意ではないかもしれないですね。元々、出がお笑いだったんですよ。

松本 そうなんですか?

永井 お笑い劇団みたいなところでギャグばっかりやってきたんだけど、やってるうちにその怖さを知ってしまって、これは出来ないと感じて。それ以来、コメディっていう構えちゃうところは正直ありません。

—青年団の作品もコメディってかチコちゃんじゃないかもしれないですけど、似てくるんですけど、やっぱり周りの先輩方がそれじゃ面白くねえよって変えてくるんだよね。前はと全然違うことやってくれるから、それにあわせていったらんだん違うようになっていく。

—永井さんから松本さんに、聞いてみたいことがありますか?

永井 聞きたい! 松本さんが苦手な台詞ってありましたか? あれいっつも言いにくい、とか。

松本 なんだったか、俺、こないだのシーズンで一回とか飛ばしたとかってことあったんじゃないかな?

—出だしてつまずいたことは…。

松本 出だしてつまずいた? オープニングで(笑)

永井 飛ばしちゃったってことですか?

—理屈として、あれ? 今おかしいこと言ったよな? みたいな感じになって。

松本 はははは、そうだ、そうだ。最初の頃はモノローグで一人で始めるっていうことが、やっぱり怖かったのかもしれないですね。

永井 最初のシーン1(注: 教授の長いセリフから物語が始まります)ってのはなかなかか。

—確かはじめ難いんですよね、本当、最初の出だして乱暴にも出来ない。

永井 いきなり一人芝居っていうのは結構…。そうか、確かにハードル高いかもしれないですね。あつ、怖くなってきた。

—永井さんは今、難い場面ってありますか?

永井 中盤が結構大変になるかっていう気は、単純にいるんな人が入り乱れて、やんややるから。昨日も演出で言われたらんですけど、あんまりテンポよくコメディみたいに自分からならないで、と。本当に下手するとそうなりがちなの。

松本 あーあー、ドタバタみたいな。

永井 そうそうそうそう。

—そうなんですよな、「ユー・キャント・ハリー・ラブ」は激しいことが起きているように、どこかいてい口火ですっどぐつぐつ燃込むような作品なんですよな。

永井 もしかしたら、この芝居ってそう動いたりなくても、成

2018年2月、札幌で生まれた名作演劇作品をロングラン公演する「札幌演劇シーズン2018-冬」で、過去にシーズンで上演された中でも評判の高かった作品を再演する「レパートリー作品」として、弦巻楽団の代表作「ユー・キャント・ハリー・ラブ」が上演されます。2003年の初演以来、今回が五度目の上演となる同作品の魅力をお届けします!

presented by 一般社団法人劇団弦巻楽団

立するんじゃないかなって思ってる。普通に会話劇としてやっても、そこそこ面白く見れるはずだけど、つい、やり取りが盛り上がりすぎてしまうんですよ。

松本 あー。

永井 徐々に徐々に。で、気が付いたら、女性が苦手になっていたのかな?これは話したあとに思い出したんですけど、自分なんですよな。結局。僕も20歳くらいまでは実はそうだったんですよ。中学校男子校で女の子に接する機会がなくて。でも女の子は普通に好きだし話したいかと思っして、学祭とかたまにナンパしたりして付き合ってたっていう感じになるんだけど…、免疫がないからどう接しいいかからない。好きな女の子から電話かかってきてても俺興味ねーよ的な感じで、「どっか行く?」とか言われても「行かない?」とか観ちゃうよな。

■13年で5回の上演、3人のヒロイン

永井 僕から松本さんに嫌な質問していいですか?

松本 えっ、はい。

永井 どの里絵(この作品のヒロイン)が一番良かったですか? 個人的に。

松本 意地悪だわ、この人(笑)。

—いい質問だね(笑)。初演と再演は、この作品の執筆を依頼してくれた劇団「Real's Production」の看板女優の安福風子さんでした。

松本 安福さんの里絵さんはすごく真面目な感じでした。劇中ではハグする場面はないんですけど、最後のほうのシーンで、劇の話をしているときに、ちょっとそういう衝動が起きている部分があったんですよ。多分、奥坂になかった母性的な…。

永井 包容力。

松本 包んであげたみたいな感情を抱いたような気がする。

永井 なるほどね。二人目が、曾我さん(ヒロイン対決参照)。

松本 曾我ちゃんは随所に出てくるんですよ、折れそうな感じが。見た目もそうだ。だから、包んであげたいっていうよりは支えたい感じ。

—では、前回2016年に続いて今回も演じる岩杉夏さんの冬樹里絵の印象は?

松本 夏さんの冬樹里絵は、役というより夏さんの存在感が「にゅっ」で出てきて。その印象の方が強い。里絵としてはシリアス的に曾我ちゃんとそんなに大きく変わらないうだけ、あの男勝りの感じが。

永井 普段のね。

松本 そうそう。だから後半激しくなっていく以降の印象が強い里絵でした。

■男として見た主人公、奥坂雄三郎

—永井さんは今回、初めて奥坂教授を演じてる訳ですが、難しさとか興味深いところはありましたか?

永井 最初のイメージと違いますが、やってみて、奥坂教授は普通だないってことをすごく感じました。誰でもあるじゃないですか、恋をするとか舞い上がっちゃうことは、それがズレて出ただけで、そんなに我々と変わらないんじゃないか、むしろ奥坂教授が一番まじめで、周りでいやいや言ってる人の方がおかしんじゃないかって最近ではらえるようにしてます。

—そういう意味ではビュアですよな、奥坂教授は。

永井 ビュア。一番。

松本 ビュア、ビュアですよ。ビュア過ぎなぐらいのビュアですよ、うん。唯つぐぐらビュアなんですよなっことですよな。

永井 そうそう。だから素直に嘘をつく。

—先日、永井さんと「奥坂雄三郎のこれまで」みたいな話をしたんです。永井さんがおっしゃったのが、大きいラウマがあったのではなくて、もっと小さいことの積み重ね、巡り合わせが響くってこういう風に意図的になってたんじゃないかと。

—同じ戯曲、舞台を経験した役者同士が何かを語るみたいなシチュエーションが手に入ってるって自体、札幌ではとても珍しいことなので、上演後にすごい有意義なものを持ってるかもしれないですね。今日はありがとうございました。



札幌演劇シーズン公式サイト <http://s-e-season.com/>

